

先制点を決めた赤嶺を祝福する選手たち
(撮影・川崎篤彦)



KOMAZAWA 駒澤大学 × 阪南大学

高い守備意識で阪南大制す！ 決勝トーナメントへ駒を進める

成功したプラン

「守備的に」(秋田監督)。それがこの試合の全てだった。阪南大に引き分け以上ならば、決勝トーナメント進出が決まる。そこで、指揮官は「DFの高さ強さに長けた」菊地をポラランチ、八角をトップ下へと配置。この采配から指揮官の意図が覗えた。

「結構崩されたが菊地と声を出して上手くいった」(八角)と、バランス良くポジションをとりまずは守備。そこから攻撃へ繋げたといったチームの守備意識が高かった。「守備は攻撃の第一歩」とは秋田監督の言葉だ。試合開始直後に生まれた赤嶺の得点は、相手のクリアボールを拾った廣井のパスから生まれたゴール。守備から攻撃が始まるというチームの徹底された意識が結実したゴールだった。

早い時間帯に先制点をゲットした駒大だが、この1点で波に乗りゲームの主導権を手中に収めたわけではなかった。阪南大は両サイドバックがオーバーラップを繰り返して、サイドから駒大を崩しにかかる。しかし、ここで崩れるような駒大DFではなかった。右サイドを駆け上がる伊野波に対して、宮崎は果敢にプレスをかけ伊野波を封殺。クロスを入れられても、そこは態勢を整えたDFが中央を固めゴールを譲らない。シュートを放たれたとしても、最後の最後はGKの牧野が立ち塞がる。伊野波と激しいマツチアツプを繰り広げた宮崎は、精度の高いパスで八角のゴールをも演出した。2点ビハインドの阪南大は、試合後半になるとその焦りからか、攻撃の形は益々伊野波頼みに。この厚みのないワンパターン攻撃に、駒大は守りやすくなり寧ろ駒大の堅守が冴えた。

試合を振り返れば、抜群の内容とは言えないかもしれない。だが、秋田監督は「内容云々は別として、いい戦い方だったと思う」と選手を称えた。20の数字を見れば、駒大の守備からというプランが成功したことは確か。「攻められたり攻めたりは厳しい試合(牧野)を制した駒大を素直に評価したい。そして、決勝トーナメントへ駒を進めた。国立での歓喜は再現なるか。この結束力があればそれは達成されるだろう。」

(伊藤 優香)